目次

最後で最初

最後で最初

「じゃあねー。」
友達である源助の家で遊んでいた幸次郎は源助に別れを告げて家に帰ろうとしていた。
「おい、帽子忘れてるじゃん。ほら。」
「そーだった！ ありがとう！」
「お前いっつも何か忘れてんだろ。そろそろやめろよなー。」
「今度から気を付けるよー。また明日ねゲン！」
「おう。」
源助の家から出た幸次郎は帰る前に小腹がすいたためにコンビニエンスストアにより、チキンを買った。幸次郎が店内から出ると、そこには老婆が一人ぽつんと座っていた。
「きれいな夕日だねぇ。」
老婆は幸次郎を見つけるとそう言った。
幸次郎は少し不気味に思い、聞いていなかったふりをして家へと帰るのであった。
「ただいまー。」
「お帰り。遅かったわね。どうせまた源助君のところでしょ。」
「まーね。」
母と少々の会話をして、幸次郎は2階の自分の部屋に戻ろうとした。
「ご飯はどうするの？ できてるけど。」
「コンビニで少し食べちゃった。後で食べるよ。」
「そう・・・。冷蔵庫に入れておくからね。お風呂はどうする？」
「入ろうかな。」
幸次郎は39℃ほどの生ぬるい風呂にはいながらスマートフォンでアニメを見ていた。一話分見終えると、少しの間目を閉じてから風呂から上がった。着替えた幸次郎はそのまま自分の部屋へと向かい、部屋へ着くなりベットに倒れこんだ幸次郎であったが、夜ご飯が出来上がっていることを思い出し1階へ行った。そして、1階に母はいなかったため、冷蔵庫にあったチャーハンを温めて1人で夜ご飯を食べていた。
「ただいまー。」
父が帰宅した。
「父さんおかえり。今日のご飯はチャーハンだよ。」
「おお、うまそうだ！」
父はそのまま2階へ着替えに行った。すぐに食べ終わった幸次郎は自分の部屋へ戻り、またベットに横になった。そして、スマートフォンを持とうとした。しかしなぜか急な睡魔に襲われて、眠ってしまったのだった。

ーーーー「起きろ！」ーーーーーー「・・・・・んん・・・ん・・」幸次郎は誰かの声が聞こえて目を覚ました。「あれ、誰もいない。今確かに誰かに話しかけられたような。寝ぼけてるのかな。」不思議に思いながらも学校に行く準備をして、朝ご飯を食べに1階へと行った。しかし、食卓にはまだ誰もいなく、仕方なくキッチンに置かれているパンを数

個食べた。「おかしいな。もう 7 時 40 分なのに誰も起きてない。父さん仕事に遅れちゃうぞ」

空棘魚

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社